

Salon

Vol.133 2021年7月 夏号



ホール4F壁画 ポール・ゴッアマン作「花とオルレアン」

CONTENTS

- 01 Prime Interview — 伊藤悠貴
- 03 Phoenix Presents — 今井信子×レーラ・アウエルバツハ
クアルテット・エクセルシオ with 後藤彩子(Va)
浄められた夜
- 06 Pick Up
レクチャーコンサートシリーズ「ピアノ三重奏の歴史」
- 07 Essay de say — 教会という体験 小石かつら

ラフマニノフの神髄に迫る 伊藤悠貴さん



©Charlotte Fielding

15歳からロンドン在住の伊藤悠貴は、2010年ブラームス国際コンクール第1位をはじめ、ウィンザー祝祭国際弦楽コンクール第1位など数々の受賞歴を誇る。ラフマニノフを得意とし、2018/19年シーズンにはロンドンのウィグモア・ホールと東京の紀尾井ホールにおいて、史上初となるオール・ラフマニノフ・プログラムによる演奏を行い、大絶賛を博した。彼の演奏は、作品の内奥へとひたすら迫る真摯なもの。緊迫感に満ち、しかもおおらかで自然体。聴き手の心を作品へと自然に近づける。今回はオール・ラフマニノフ・プログラムを初めてザ・フェニックスホールで演奏するが、この選曲はどのような意図があるのか、また、ラフマニノフに対する深く強い思いなどを聞くことができた。伊藤悠貴はチェリストおよび指揮者として活発な活動を行い、さらに作曲・編曲などもこなし、加えて執筆活動も行うという才能豊かな逸材。ロンドンを拠点に、世界に飛翔するたのもしき存在である。

(取材・文:伊熊よし子/音楽ジャーナリスト)

伊藤悠貴(いとう・ゆうき/チェロ)

15歳で渡英。王立音楽大学在学中にブラームス国際コンクール、およびイギリス最高峰として知られるウィンザー祝祭国際弦楽コンクールで第1位を受賞。第2回フルニエ基金賞、第17回齋藤秀雄メモリアル基金賞受賞。フィルハーモニア管弦楽団、クラゲンフルト歌劇場管弦楽団、読売日本交響楽団など国内外の主要オーケストラや、小澤征爾、アシュケナージ、小林研一郎など世界的アーティストと共演を重ね、ウィグモア・ホールをはじめロンドン、パリ、ローマ、ミュンヘンなど欧州主要都市、北米、アジア、アフリカ各地のリサイタル、音楽祭に客演。ラフマニノフ作品、およびイギリス音楽の多分野にわたる研究と普及をライフワークとし、CDは「ラフマニノフ:チェロ作品全集」などをリリース。指揮者、作編曲家、ラジオパーソナリティ、文筆家としても活動し、2013年にロンドンでナイツブリッジ管弦楽団を創設。使用楽器は日本ヴァイオリンより貸与の1734年製ゴフリヤー。

伊藤悠貴 チェロリサイタル

2021年10月1日(金) 14:00開演 指定席 ＊お菓子付き
一般3,000円 友の会会員2,700円 学生(25歳以下)1,000円(限定数)

■プログラム

ラフマニノフ:伊藤悠貴編による「6つの祭り」
夜のしじま op.4-3、マヒワの死に寄せて op.21-8
吊いの鉄の鐘「永遠の眠りもたらす心の平安」(合唱交響曲「鐘」 op.35より)
ここは素晴らしい op.21-7、夢 op.38-5、神の栄光(遺作)
ラフマニノフ:チェロソナタ ト短調 op.19 ほか(予定)

■チケットのお求め、お問い合わせ

ザ・フェニックスホールチケットセンター
06-6363-7999(平日10時~17時、土日祝休)

アシュケナーズとの思い出深いソナタを演奏

Ito
Yuki

今回の選曲のコンセプトをお話いただけますか。

ラフマニノフ・プロを組むときは、いつもテーマを少しずつ変えています。今回はザ・フェニックスホールとの親密な響きを考慮し、ラフマニノフの歌曲(伊藤悠貴編)を前半に組み、作曲家の人生の変遷をたどりたと思います。「6つの褥り」は人の一生を意味し、生と死にまつわるテーマが根底に流れています。編曲に関してはオリジナルを重視するのはもちろんですが、ラフマニノフの場合は音のある程度削る作業が必要となります。

ラフマニノフに魅せられたのは8歳から10歳のころで、和声に惹かれました。録音を聴いたのですが、いままで聴いてきた他の作品とはまったく違って強烈な印象を受けました。ハーモニーの美しさがすばらしいなと思い、その思いはいまでもまったく変わりません。周囲の人には、大人になったら好きな作曲家や作品などの好みは変わるといわれたのですが、20年たっても変わらない。ずっとラフマニノフひと筋です。

ぜひロシアのラフマニノフゆかりのイワノフカ村を訪ねてみたいのですが、まだ実現はしていません。モスクワやサンクトペテルブルクには行っているのですが、これだけ長い間ラフマニノフに愛を捧げているのですから、イワノフカは行かないとね(笑)。

チェロを始めたきっかけと、ロンドンを拠点に活動を始めた経緯を聞かせてください。

5歳で、最初はヴァイオリンを始めたんです。でも、僕はずっと立って弾いているのに、先生はすわっている。それがどうしても気になって、両親に「すわって弾きたい」といったら、「じゃ、チェロにしなさい」ということでチェロを習うことになったのです。不思議な理由でしょう。

15歳で親の仕事の関係でロンドンに移り、着いた翌日にロシア出身の先生にレッスンをもらうことになりました。時差もあり、ことばもわからず、すごく大柄な先生だったので怖くて、大変でした。でも、ロンドンはずごく僕に合っていて、

ここにいたら最高の勉強ができると感じました、音楽のみならず芸術全般や文学なども。その後、両親は他国に移ったのですが、僕はロンドンに残って寮生活を送り、とにかくすべてが英語の授業なので語学の勉強を必死に行いました。学生時代は自分が果たして音楽家になれるのかと常に自問自答。壁にぶつかってばかりの日々でしたが、ターナーやコンスタブル、ドラクロワの絵画を見たりして、感性を磨きました。

僕は往年の名手、アルフレッド・コルトー、モーリッツ・ローゼンタール、アルトゥール・シュナーベル、オットー・クレンペラーが大好きで、古い録音をよく聴きます。一度でいいから彼らと話をしたかった。100年生まれるのが遅すぎましたね。

プログラムの後半はチェロ・ソナタが組まれていますが、これも得意とする曲ですね。

実は、このソナタには大切な思い出があります。以前、僕が通っていた王立音楽大学にウラディーミル・アシュケナーズが訪れたことがあり、演奏を聴いてもらう機会を得ました。アシュケナーズは年に1回学校のオーケストラを振りに来ていたのですが、そのときは僕と一緒にラフマニノフのチェロ・ソナタを演奏したのです。アシュケナーズは「この曲、20年ほど弾いていないなあ」といいながら、ピアノを弾いてくれました。もう感激しすぎて、詳細は覚えていないくらいです(笑)。

そういう生涯の宝物のような音楽家との出会いは、他にもありますか。

ずっとダヴィド・ゲリンガスに師事していますが、先生はひとりの作曲家の作品に絞ってリサイタルを行うことは、とても勉強になるといってくれます。そのなかで、「いろんな色を出せないとダメだ」というのです。ひとりの作曲家のプログラムがつまらないと思われたら意味がないと。今後もゲリンガス先生から多くのことを学びたいですね。

もうひとり、2012年に小澤征爾指揮オザワ祝祭合奏団と共演したことがあるのですが、この小澤さんのカリスマ性には驚かされました。アン

サンプルは日本の精鋭10人ほどで構成されていましたが、小澤さんが指揮台に立つと音が瞬時に変わるのです。僕も自分の音が変わることに驚きました。マエストロのもつ集中力のすごさはことばにはできません。奏者からもてるすべてを引き出すことができるのです。カザルスの「鳥の歌」他を演奏しましたが、一生忘れられない共演です。

今後もラフマニノフの作品をずっとレパートリーの根幹に置いていこうとお考えですか。

2023年はラフマニノフの生誕150年のメモリアルイヤーですから、この年まではずっと集中して弾き続け、ここでいったん区切りをつけて違う世界へと目を向けようと考えています。僕は後期ロマン派のマーラー、R.シュトラウス、ヴォルフなどの歌曲が好きで、そうした作品を編曲してチェロで弾きたいと思っています。ブラームスやシューマンの歌曲もいいですね。いい歌手との出会いがあったら、声楽とチェロのデュオも夢見ています。

いまの楽器との出会い、相性はいかがですか。

3年前に日本ヴァイオリンから貸与された、1734年製のマッテオ・ゴフリラー(1659~1742)のチェロを使っています。ゴフリラーはヴェネツィアで活動した弦楽器製作者です。まさにヴィヴァルディが生きていた時代の楽器で、その歴史や伝統などの息吹を感じることができます。最初はチェロが5台用意されていて、製作者の名前は伏せられていました。僕はゴフリラーを弾いた途端、「これだ!」と直感し、この楽器を貸与させていただくことが可能になりました。以前、ロンドンでアマティの楽器を弾いていたことがあるのですが、どうしても合わなくて自分の思う音が出せず、1カ月で返却したことがあります。でも、他のチェリストはずごく合うといっていました。

弦楽器というのは本当にミステリアスなもので、相性があるんですね。そのゴフリラーを友に、今回はラフマニノフの神髄に迫りたいと思います。



ザフェニックスホール
友の会優先予約

7月16日(金)
10:00 受付開始

イーフェニックス
E-PHX優先予約

7月19日(月)
10:00 受付開始

一般発売
7月20日(火)
10:00

インターネット予約による
お申込みは7月21日(水)10:00から!

■注目アーティストシリーズ78

2021年12月5日(日)

15:00開演 指定席
一般¥4,000(友の会会員¥3,600)
学生(25歳以下) ¥1,000(限定数)

ヴィオラの巨匠とロシア出身気鋭の作曲家が響演。
注目のオール・ロシアン・プログラム!

今井信子×レーラ・アウエルバッハ
～ヴィオラとピアノのための24の前奏曲～

出演 今井信子(ヴィオラ)、レーラ・アウエルバッハ(ピアノ)

曲目 プロコフィエフ:ピアノソナタ 第2番 二短調 op.14 ショスタコーヴィチ:ヴィオラとピアノのための即興曲 op.33
プロコフィエフ(ボリソフスキー編):バレエ音楽「ロメオとジュリエット」より アウエルバッハ:ヴィオラとピアノのための24の前奏曲「さすらい人」(2018)

アウエルバッハさんとは2019年に、彼女の弦楽四重奏と合唱の為の作品をベルリンで初演したときに知り合いました。リハーサルの際に、時にはロマン派や印象派の作曲家の作品の例も出しながら、作品の背景を丁寧に説明してくださったのが印象的で、私もどういう風に作品を捉え演奏すべきかが直ぐに分かりました。作曲家の中には人と違う奇想天外な事ばかりを求める人もいますが、彼女の場合はその人間性から滲み出るのが自然に音楽になっており、とても共感できます。現代的な感覚を持ちながらも、和声はブラームスなどまるでロマン派音楽のような響きも感じられ、しっかりとした様式感もあり、彼女の音楽がクラシック音楽の伝統に根ざしたものであるのがわかります。アウエルバッハさんはピアニストとしても活躍しており、和声や様式に対する優れた感覚が演奏にもとても生かされていると思います。2年越しとなったこの共演を楽しみにしております。

(今井信子/ヴィオラ奏者)



©Marco_Borggreve

今井信子(いまい・のぶこ/ヴィオラ)

桐朋学園大学卒業。イェール大学大学院、ジュリアード音楽院を経て、1967年 ミュンヘン、68年ジュネーヴ両国際コンクールで最高位入賞。70年西ドイツ音楽功労賞受賞。ベルリン・フィル定期や小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラとのザルツブルク音楽祭出演など、世界の検舞台で活躍を続けている。室内楽にも積極的に取り組んでおり、フェルメール、ミケランジェロ両弦楽四重奏団のメンバーを務めたほか、五嶋みどり、マルタ・アルゲリッチ、アンドラーシュ・シフ、ギドン・クレーメル、ミッシェル・マイスキーらと共演している。日本ではカザルスホールの音楽アドバイザーを務めたほか、<カザルスホール・アンサンブル>、<ヴィオラスペース>などの企画・演奏、また数々のヴィオラ作品の世界初演を行うなど、ヴィオラ界をリードする存在として、めざましい活躍を続けている。あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールでは2021年3月まで音楽アドバイザーを務めた。フィリップス、BIS、グラモフォン等から40以上のCDをリリース。著書に「憧れ ヴィオラとともに」(春秋社)がある。これまでにエイボン女性芸術賞、文化庁芸術選奨文部大臣賞、京都音楽賞、モービル音楽賞、毎日芸術賞、サントリー音楽賞を受賞。紫綬褒章、旭日小綬章受章。アムステルダム音楽院、クロンベルク・アカデミー、ソフィア王妃高等音楽院各教授。上野学園大学特任教授。



©N.Feller

レーラ・アウエルバッハ(Lera Auerbach/作曲・ピアノ)

レーラ・アウエルバッハは詩人、作曲家、ピアニスト、ビジュアル・アーティストである。これまでにオペラ、バレエ、オーケストラ、室内楽のために100以上の作品を出版している。またピアニストとしても世界各地で積極的に活動を行っている。その作品は世界の主要な演奏家、指揮者、演出家、振付家から高い評価を得ており、最近ではサンフランシスコ・バレエ団、スタニスラフスキー劇場、ハンプルク・オペラ、アン・デア・ウィーン劇場、中国国立バレエ団、フィンランド国立バレエ団、カナダ・ナショナル・バレエ団、ネザールランド・ダンス・シアター、ドレスデン・ゼンパーオーパーおよびシュターツ・カペレ、ニューヨークのリンカーン・センター等で取り上げられている。また詩人としても活発に活動を行っており、ベスト・アメリカン・ポエトリーのブログにたびたび寄稿しているほか、ロシア語による詩集を3冊出版、またいくつかのオペラの台本も執筆している。これまでにゴールデン・マスク賞、エコー・クラシック、ヒンデミット賞等を受賞。またハノーファー音楽演劇大学、ジュリアード音楽院から学位を授与されている。2007年の国際経済フォーラム(スイス、ダヴォス)ではヤング・グローバル・リーダーに、2014年には同フォーラムの文化リーダーに選出され、国境を越えた創造性について講演も行った。同様のテーマでミシガン大学、ハーバード大学等でも講演を行っている。

■共同主催

主催 公益財団法人 日本室内楽振興財団/あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

2022年2月12日(土)

日本発の国際派団体。元シューマン・クアルテット後藤と豪華共演。
クアルテット・エクセルシオ with 後藤彩子(Va)14:00開演 指定席
一般¥4,000(友の会会員¥3,600)
学生(25歳以下)¥1,500(限定数)出演 西野ゆか、北見春菜(以上ヴァイオリン)、吉田有紀子(ヴィオラ)、大友肇(チェロ)
後藤彩子(ヴィオラ)
曲目 ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第2番 ト長調 op.18-2
シューベルト:弦楽四重奏曲 第12番 ハ短調「断章」D703
望月京:Boids(2018)
Boids again(2020) ※世界初演 第10回大阪国際室内楽コンクール委嘱作
メンデルスゾーン:弦楽五重奏曲 第2番 変ロ長調 op.87

日本発の国際派室内楽団体がザ・フェニックスホールに戻ってきます!2019年の「弦楽四重奏の饗宴」シリーズでも多くのファンを魅了した、優美なサウンドによる弦楽四重奏の王道レパートリーに加えて、今回はメンデルスゾーンの五重奏曲を演奏します。共演するヴィオラの後藤彩子は、ドイツを拠点に世界で活躍する気鋭の四重奏団「シューマン・クアルテット」の草創期を築いた実力派です。欧米での評価も高い作曲家、望月京の弦楽四重奏曲2曲(うち1曲は世界初演!)を加えた充実のプログラムで、室内楽の新たな未来を拓くコンサートとなることでしょう。ぜひお聴き逃しなく!

クアルテット・エクセルシオ
(Quartet Excelsior/弦楽四重奏)

「繊細優美な金銀細工のよう」(独フランクフルター・アルゲマイネ紙)と'16年ドイツデビューで称賛された、年間70公演以上を行う日本では数少ない常設の弦楽四重奏団。ベートーヴェンを軸に王道レパートリーの『定期公演』、20世紀以降の現代作品に光をあてる『ラボ・エクセルシオ』、次世代の弦楽四重奏団との共演『クアルテット・ウィークエンド』などを展開しつつ全国的に活動。'94年結成。第2回大阪国際室内楽コンクール弦楽四重奏部門第2位、難関の第5回パオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール最高位ならびにS.シャリノ特別賞、第19回新日鉄音楽賞「フレッシュアーティスト賞」、エクセルシオが全曲演奏した作曲家グループ「クロノイ・プロトイ」の公演が第9回佐治敬三賞を受賞など受賞歴多数。「ベートーヴェン第11番セリオーソ&第15番」を始め、「ベートーヴェン作品18全6曲」、「ベートーヴェン作品59ラズモフスキー全3曲」、「ベートーヴェン作品127&135」など数多く収録。

後藤彩子
(ごとう・あやこ/ヴィオラ)

東京藝術大学附属音楽高等学校を卒業後、ケルン音楽大学、デトモルト音楽大学、マドリッドのソフィア王妃音楽大学に進学。ギェルツェニツヒ管弦楽団、デュッセルドルフ交響楽団の契約団員。2012年までシューマン・クアルテットの一員として演奏活動を行う。2011年パオロ・ボルチアーニコンクール入賞、大阪国際室内楽コンクール第2位、2012年シューベルト&現代音楽国際コンクールにて優勝。京都市立芸術大学の講師を経て、現在堀川音楽高校講師。

ホール主催・共催・協賛公演チケットのお申し込み方法

06-6363-7999

土・日・祝日を除く平日の10:00~17:00

<https://phoenixhall.jp/>

チケットセンターのページからお申込みください

チケットセンター
来店窓口臨時休業中

- ザ・フェニックスホール友の会優先予約
 - ・ザ・フェニックスホール友の会会員様の優先予約日です(電話予約のみ)。
 - ・主催公演1公演につき会員お1人様2枚まで1割引でお求めいただけます。チケット購入の際、枚数制限はありませんが、3枚目以降は一般価格となります。
 - ・友の会への入会をご希望の方は、チケットのお申込み時にお電話でお申しつけください。同時に優先予約をお受けすることができます。その際、年会費1,000円が別途必要となります。

- E-PHX(イーフェニックス)優先予約
 - ・E-PHX(イーフェニックス)にご登録の方の優先予約日です(電話予約のみ)。
 - ・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。
 - ・事前にザ・フェニックスホールホームページ、ホール会員のページからご登録ください。お電話でのご登録はできません。

- 一般発売
 - ・一般発売日は、電話予約のみのお申込みとなります。
 - ・チケット購入の際、枚数制限、割引はありません。

- インターネット予約(主催公演のみ)
 - ・ザ・フェニックスホールホームページ、チケットセンターのページからお申込みください。
 - ・チケット予約フォームに記載のない公演につきましてはおそれ入りますがお電話でお問合せください。
 - ・ホームページ更新の都合により、完売表示のない公演でもお申込み時には完売となっていることもございます。どうぞご了承ください。
 - ・学生券のインターネットによるご予約は受付いたしておりません。
 - ・チケットご予約フォーム送信後、営業日3日以内に座席の有無、座席番号、入金方法につきまして確認メールをお送りいたします。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、引き続きビル8階のチケットセンター来店窓口を臨時休業いたしております。お客様には大変ご不便をおかけいたしますが、何とぞご了承くださいませようお願い申し上げます。

チケットお申込み後のお受け渡し方法

電話予約後に郵便振込をいただき、入金確認後にチケットをご郵送させていただきます。皆様のお手元にチケットが届きますのはご入金をいただいてから約10日後となります。その際、振込手数料はお客様にてご負担ください。尚、郵送は簡易書留(一律420円)のみとさせていただきます。

振込口座 00940-0-95351 加入者名 ザ・フェニックスホール

■フェニックス・エヴォリューション・シリーズ98

主催 Ensemble Amoibe(アンサンブルアモイベ) 石上真由子

2021年11月3日(水・祝)

16:00開演 自由席
 一般前売¥4,000(友の会会員¥3,600)
 当日¥4,500(友の会会員¥4,050)
 学生(25歳以下)前売¥3,000
 当日¥3,500

後期ロマン派の最高傑作を、ソロ・室内楽からオーケストラまで、
 様々なフィールドで活躍する実力派演奏家たちがお届けします。

浄められた夜

出演 石上真由子、伊東真奈(以上ヴァイオリン)、大山平一郎、中恵菜(以上ヴィオラ)、
 金子鈴太郎、辻本玲(以上チェロ)

曲目 ブラームス:弦楽六重奏曲 第1番 変ロ長調 op.18
 シェーンベルク:浄夜 op.4



毎年、暑い夏が終わって、朝晩が少し肌寒く、風に秋の薫りが混ざりはじめると、シェーンベルクの浄夜が恋しくなります。詩や音から、情景を、季節を、温度を、香りを、想像し、無意識のうちに記憶の中へとしまい込んでいるのかもしれませんが。当時、室内楽ではまだ珍しかった表題音楽、デーメルをともに書かれた若かりしシェーンベルクの美しい作品「浄夜」、そして彼が敬愛した作曲家ブラームスの同じく初期の弦楽六重奏曲をとりあげます。各地でソロ・室内楽・オーケストラ等、様々なフィールドで活躍する演奏家6人が集結。

■フェニックス・エヴォリューション・シリーズ95

主催 レヒネル・トリオ事務局

2021年12月14日(火)

19:00開演 自由席
 一般前売¥2,500(友の会会員¥2,250)
 当日¥3,000(友の会会員¥2,700)
 学生(25歳以下)前売¥1,500
 当日¥2,000

レヒネル・トリオ×松井拓史。弦楽器はいかに自立していったか？
 ピアノ三重奏の誕生と変質を追う。

レクチャーコンサートシリーズ

※2021年2月13日(土)の振替公演

「ピアノ三重奏の歴史」第1回:弦楽器が歌い出すとき



出演 長尾春花(ヴァイオリン)、水野優也(チェロ)、水谷友彦(ピアノ)
 松井拓史(レクチャー)

曲目 ハイドン:ピアノ三重奏曲 第25番 ト長調「ジプシー」Hob.XV:25より 第1楽章、第3楽章
 ベートーヴェン:ピアノ三重奏曲 第7番 変ロ長調「大公」op.97より 第1楽章
 ブラームス:ピアノ三重奏曲 第1番 ロ長調 op.8(改訂版)より 第1楽章

ピアノ三重奏という演奏形態が生まれたのは18世紀後半、バロック時代のトリオ・ソナタというジャンルから派生したと言われていいます。当時はまだ「伴奏付きソナタ」、つまり鍵盤楽器が主役で、弦楽器はあくまで伴奏的な役割を担うものと考えられていました。その後、弦楽器が次第に独立性を獲得していき、19世紀ヨーロッパ社会のサロン文化の中で、ピアノ三重奏は私的でロマンティックな音楽を担うジャンルとして認められるようになります。今回は数あるピアノ三重奏曲の中から、ハイドンの「ジプシー」、ベートーヴェンの「大公」、そしてブラームスの第1番を取り上げ、こうした変化の歴史を追っていきます。どれもピアノ・トリオのレパートリーには必ずと言ってよいほど入っている作品ですが、各楽器の役割に注意しながら聴き比べてみると、それぞれが異なる特徴を持った、しかしどれも驚くほど立体的な音楽であることに気がつきます。また、3人の作曲家はそれぞれハンガリーに縁が深く、現在ハンガリーで活動している我々が取り上げるにはうってつけと言えます。ピアノ三重奏の歴史、そしてハンガリーという2つのポイントから眺めることで、これまで演奏し尽くされ、聴き尽くされてきた名曲がまったく新しいものとして聴こえてくる、そんな体験をしていただければと思います。

エヴォリューションシリーズ公演が 大阪文化祭奨励賞を受賞!

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールの共催事業「フェニックス・エヴォリューション・シリーズ」において2020年2月15日(土)に開催しました「會田瑞樹 ヴィブラフォンソロリサイタル in OSAKA」が評価され、會田瑞樹さんが令和2年度大阪文化祭奨励賞を受賞されました。



あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール協賛公演のご案内

ザ・フェニックスホール友の会会員の方には割引特典があります。当日券をお買い求めの際は会員証をご提示ください。

協賛
公演

Quartet Exploce Tour 2021

主催 フィリー企画

8/2(月)
発売

2021年10月23日(土) 14:00開演 指定席
一般前売¥3,500(友の会会員¥3,150) 一般当日¥4,000(友の会会員¥3,600)
学生前売¥1,500 学生当日¥2,000

出演 辻本玲、市寛也、森山涼介、高木慶太(以上チェロ)

曲目 J.S.バッハ:シャコンヌ シューマン:子供の情景 ショパン:序奏と華麗なるポロネーズ
映画音楽:『マイ・フェア・レディ』から「踊り明かそう」、『シンドラーのリスト』から「メインテーマ」、
『風と共に去りぬ』から「タラのテーマ」
タンゴ:エル・チヨクロ、カフェ1930 ほか

クアルテット・エクスプローチェが2年ぶりの大阪公演を開催します!残念ながら昨年は中止となってしまいましたが、さらにパワーアップして帰ってきました!メインはピアノ曲の名作で、一度は皆さんも耳にしたことがある「トロイメライ」も含まれている曲集シューマンの“子供の情景”です。後半は“シンドラーのリスト”、“マイ・フェア・レディ”などの映画音楽、そしてお馴染みのピアノソラで締めくくります!会場でお待ちしています!

協賛
公演

プラジャーク・クワルテット

主催 コジマ・コンサートマネジメント

ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 後期作品全曲ツィクルス(全3回)
ベートーヴェン生誕250周年記念

※2020年10月の振替公演

発売中

2021年10月25日(月)・26日(火)・27日(水) 19:00開演 指定席 ※友の会割引・通し券は前売のみ限定
前売・当日 ¥6,000(友の会会員¥5,400) 3公演通し券¥16,500(友の会会員¥15,500)

出演 ヤナ・ヴォナシュコーヴァ、ヴラストミル・ホレク(以上ヴァイオリン)、ヨセフ・クルソニユ(ヴィオラ)、ミハル・カニユカ(チェロ)

曲目 [10/25] ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第16番 へ長調 op.135、弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 op.132
[10/26] ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第12番 変ホ長調 op.127、弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 op.131
[10/27] ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 へ長調 Hess34、弦楽四重奏曲 第13番 変ロ長調 op.130/「大フーガ」 op.133

1972年に結成されて以来常にその音楽の質の高さにより注目を集めてきたプラジャーク・クワルテット。2015年より第一ヴァイオリンにヤナ・ヴォナシュコーヴァが加わり新しい時代を経て、この度現メンバーによる最後の日本公演に相応しいベートーヴェンの弦楽四重奏曲後期作品を3夜に渡り全曲演奏します。どうぞお聴き逃しなく。

協賛
公演

稲垣聡ピアノリサイタルシリーズ(全3回)

主催 サウンド・inn企画

《ルートヴィヒの遺言～最後の三つのソナタとともに～》
Vol.1 “祈り” L.v.ベートーヴェン+権代敦彦

※2020年11月の振替公演

8/10(月)
発売

2021年11月4日(木) 19:00開演 自由席 一般前売¥3,500(友の会会員¥3,150)
一般当日¥4,000(友の会会員¥3,600) 学生前売¥2,000 学生当日¥2,500

出演 稲垣聡(ピアノ)

曲目 J.S.バッハ:平均律クラヴィア曲集 第1巻 第13番 嬰へ長調 BWV858、第2巻 第14番 嬰へ短調 BWV883
ベートーヴェン:幻想曲 ト短調 op.77、ピアノソナタ 第30番 ホ長調 op.109
権代敦彦:R.I.P.Glas ~弔鐘~(1999)
狂ったように、狂ったように、私も光を求める(2000/2001) op.61
ピアノのための“Mi~霊~”(2019) op.170

バッハから数々の新作初演や舞踊とのコラボレーションなど、多彩な活躍をみせる稲垣聡(相愛大学教授)が、ベートーヴェン・イヤーを機に最後の三つのソナタと近現代作品を交差したプログラムによる3ヵ年プロジェクトをスタート。初回は「祈り」をテーマにバッハと権代敦彦作品をベートーヴェンと対峙させる。約300年の時の流れを2時間で体感するスケールの大きなプログラムにご期待ください。【東京公演:2021年11月18日(木) 東京オペラシティ リサイタルホール】

協賛
公演

“KCM Concert at The Phoenix Hall, Osaka”

主催 コジマ・コンサートマネジメント

～関西圏の最大拠点 梅田で展開する芸術音楽～

関西弦楽四重奏団 ～ピアノ・クインテット傑作選～

発売中

2021年12月17日(金) 19:00開演 指定席
前売・当日¥6,000(友の会会員¥5,400) ※友の会割引は前売のみ

出演 関西弦楽四重奏団/林七奈、田村安祐美(以上ヴァイオリン)、小峰航一(ヴィオラ)、上森祥平(チェロ)
岸本雅美(ピアノ)

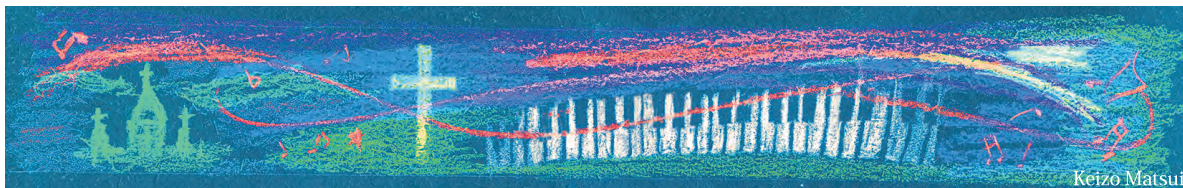
曲目 ラフマニノフ:弦楽四重奏のための「ロマンス」
シューマン:ピアノ五重奏曲 変ホ長調 op.44
ブラームス:ピアノ五重奏曲 へ短調 op.34

当ホールでお馴染みの関西弦楽四重奏団が往年の巨匠ゲルハルト・ボッセの絶大な信頼を得て共演を重ねた名手・岸本雅美(ピアノ)を迎え、ピアノ・クインテットの傑作をお贈りします。



教会という体験

— 小石かつら



中学と高校はプロテスタント系の学校に通ったので、毎朝礼拝があった。音楽の先生に手ほどきを受けてオルガン奏楽をさせてもらい、卒業後も週に3日、弾かせてもらい続けた。

という話を、25歳でドイツに留学した時、たまたま電車で隣に座ったお姉さんにした。あろうことか、そのお姉さんは修道女だった。それで、次の日曜からケルン近郊の修道院でオルガンを弾くことに決まってしまった。カトリックのミサのことは知らないと言ってもおかまいなし。聖歌のタイミングがわからず、ミサは気が遠くなるほど長かった。やっと終わると、温かい食事をいただいて、静かで、ゆったりとした時間を過ごした。窓から入る光のゆらめきや食器の音。それは、今でも思い出してはひたひたと満たされる、イメージ通りの宗教的な時間だった。

その修道院と同時進行で、ケルンのメーアハイムというところにあるプロテスタント教会でも奏楽を頼まれた。いくらなんでも、カトリックとプロテスタントの教会で同時に弾くなんて、と言ってみたが、どちらからも問題なしとの返答で、プロテスタント教会では聖歌隊の方々と親しくさせてもらった。私自身も中学高校時代の部活動は聖歌隊だったので、賛美歌もわかるし、練習の勘所もわかる。ドイツと日本との「違い」ばかりを意識してしまう日常の中で、共通項があるのは、とても心地よかった。

そんなある時、留守番を頼まれた。それは「牧師夫人が不在の間」という数週間におよぶ留守番で、私は教会隣接の牧師館に住み込んだ。牧師さんは多忙なので、誰かが教会に常駐していなければいけないという理由である。

最初の衝撃は、教会内に中学生がたむろしているのを発見した時だった。顔にもお臍にも巨大なピアスがジャラ

ジャラしていて、髪は赤や緑で、ものすごくあやしい雰囲気。気が満ちている。じりじりと後ずさりして、慌てて牧師さんに報告すると、「ああ、中学生たちね。いい子たちだ。よく来るよ。あそこが居場所なんだ」と、平然として「それがどうかしたの？」という返事だった。彼らは日暮れごろにやってきて、夜遅くまでずっといた。時々、ギターを弾いていて、やがて私にも、優しい目を向けてくれるようになった。

1日目だったか2日目だったか、牧師館の台所に誰かいた。牧師さんは普通にパンを切りながら、私に言った。「誰か来たら、食べるものをあげて。中に入って食べたくはない、という人には、このチケットをあげて。このチケットがあったら、そこのスーパーで食料品が買えるから」。たじろぐ暇はなかった。牧師館の勝手口には、毎日のように「何か食べ物がほしい」という人が来た。牧師館の地下には大きな棚があって、チョコレートやクッキー等のお菓子が段ボールごと、ぎっしり入っていた。顔見知りにならないくらい、違う人が来た。

留守番が必要だということの意味がわかったころ、血相を変えた高校生くらいの女の子が駆け込んできた。「お父さんがお酒を飲んで暴れてる。助けに来て！早く！」私はびっくりしすぎて、その時、どう返事をしたのか覚えていない。教会にも牧師館にも、誰もいなかった。私は、彼女の家に行かなかった。

共同体と教会。そして音楽。わからないまま月日が過ぎた。5年程前、彼らはどうしているだろうと思って、教会にメールを書いた。即座に、見知らぬ名前から返事が来た。そこには、牧師は数年ごとに転勤すること、かつての牧師が今どこにいるかはわからないことが、丁寧に書かれていた。

小石かつら (こいし・かつら) / 関西学院大学文学部教授

京都生まれ。同志社女子大学、京都市立芸術大学大学院でピアノを、ライプツィヒ大学、ベルリン工科大学、大阪大学大学院で音楽学を学ぶ。博士(文学)。京都大学白眉センターを経て、関西学院大学文学部教授(音楽学)。専門は19世紀西洋音楽史。とりわけ、近代的な演奏会の成立と変遷の解明を課題として、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラムを調査している。共訳書に『シャンドールピアノ教本』(春秋社)、『ギャンブラー・モーツァルト』(春秋社)。共著に『他者との邂逅は何をもたらすのか』(昭和堂)など。



あいおいニッセイ同和損害保険株式会社は、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールをフェニックスタワー内に設けています。芸術・文化の発信基地として、関西の芸術文化発展に寄与しています。

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー8F TEL 06-6363-0211
Copyright(C) 2011 The Phoenix Hall All rights reserved. 本誌に掲載された記事、写真、イラスト等の無断掲載を禁じます。

発行年月 2021年7月
発行 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
編集 上田英司
デザイン 松井桂三有有限会社

